

SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

「信用スコアリング」システム (「信用リスク定量化」の試み)

まず、次の表を見て欲しい。

スコア 区分	決算書数	デフォルト発生率の実績	
		1年以内	2年以内
0～10	10,238	3.52%	12.46%
11～20	15,150	2.50%	9.61%
21～30	25,732	1.52%	6.40%
31～40	43,494	1.09%	4.52%
41～50	57,843	0.61%	3.05%
51～60	76,496	0.42%	2.15%
61～70	85,360	0.26%	1.45%
71～80	89,129	0.12%	0.79%
81～90	60,701	0.06%	0.48%
91～	40,900	0.05%	0.24%
総計	505,403	0.53%	2.40%

何だか訳の分からない数字が並んでいるように見えるかもしれないが、この数値は、50万社を上回る企業の、財務情報、非財務情報、デフォルト情報を蓄積・共有化し、数理統計的手法を用いて信用スコアとデフォルト(債務不履行)発生との相関関係を表示したものである。

この表は、スコアが10点以下の企業は、1年以内に債務不履行(経営破綻)となる可能性は3.52%だが2年以内になると12.46%と跳ねあがる。スコアが91点以上のとなると、破綻する可能性は1年以内では0.05%、2年以内では0.24%と極めて低いことを示している。つまり、スコアとデフォルト率の関係が一目瞭然となっている。

現在、幾つかのデータベース機関で、金融機関が保有する多数の企業データを集め信用リスクのデータベース化が試みられている。上表は、中小企業庁が主導するCRD(Credit Risk Database)運営協議会が公表したものであるが、今後このような「信用スコアリング」と呼ばれるものが、金融機関の中小企業融資の現場で徐々に使われてくるものと思われる。

このスコアリング設定目的は、貸す貸さないという与信判断に使うというより、むしろプライシング(値付け・金利設定)及び貸出資産管理に使うことを目的としている。

上表で云えば、スコア15点の会社は、期間1

年以内の借入を受ける場合は標準金利+2.50%、1年以上2年以内の借入に当っては標準金利+9.61%が理論的な適用金利となる。期間3年以上は出ていないので想像するしかないが、かなり高くなるものと思われる。勿論スコアが良くなるにつれデフォルト発生率が低下するから借入金利は低くなる。

現在の状況でこのスコアリングを適用すると、多くの中小企業で借入金利が急上昇する。これはかなり厳しい。じゃ、この方式は駄目かということでもない。重要なのは、この金利体系はデフォルトリスクを予め金利自体に織り込んでいるということだ。つまり、今まで担保や保証が果たしていた役割を金利自体に負わせることによって融資から担保と保証を解放する。

我が国の金融機関は、長い間「担保と保証」を貸出審査の機軸においてきた。それが結果としてバブルを引き起こし、バブル崩壊をより深刻なものにした。そして不幸なことに、依然として担保と保証という発想から逃れられないでいる。口を開けば担保・保証という体質は一向に変わっていないように見受けられるが、「脱担保・保証の試み」は既に始まっている。その一つが信用リスク定量化による信用スコアリングである。

既に6年以上、金額で110兆円以上も貸出残高を減らし続けてきた我が国の銀行も、このまま担保偏重の融資体制を続けてゆけば自らが立ち行かなくなることを自覚し始めた。担保と保証にこだわって貸出金利という大きな収益源を失うことになる。その意味で、銀行はいま自らの存立基盤を問われているのだが、信用スコアリングはその打開策の一つなのだ。

これが理論通り機能すれば、企業倒産によって発生する貸倒損失は上乗せ金利が吸収してくれる。だから担保も保証人も要らない。そうなる。問題はそう簡単に普及しないということだ。

信用スコアリングが普及するには、そのスコアに高い信頼性がなくてはならない。最低限、銀行がそのデータを信用しなくてはならない。そのハードルはかなり高い。第一、銀行が担保と保証を易々と捨てるほど勇気があるとも思えない。「徐々に」「慎重に」「実験的に」導入する筈だ。尤も私達は、銀行の動向とは関り無く粛々と財務体質を強化してゆくのみであるが、...